

善隣

No.536 通巻803

2023年（令和5年）6月1日発行（毎月1日発行）

2023

6



一般社団法人 国際善隣協会



公開 第2回対面&オンライン講演会（2023年4月27日）



【善隣中国塾】（2023年4月21日）

善 隣

目 次

2023年 6 月号

公開講演会記録

近世以前の日本建築における大陸からの影響
——英国の建築がヨーロッパから受けた影響を考慮して
……………モリス、マーティン・ノーマン 2

「桜校長」高松祐一をめぐる桜……………細川呉港 13

「マクロン主演！」のウクライナ和平案
——習近平の苦心、その挫折後に見えるもの ……………田畑光永 21

陶々俳壇 ……………馬場由紀子 29

中国ウォッチング ……………編・訳 上松玲子 30

協会通信・会員だより・同好会だより…………… 32

2023年 6 月の行事予定…………… 33

—— **善 隣** 第536号 通巻803号 ——

2023（令和 5）年 6 月 1 日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋 1-5-5
一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03（3573）3051
FAX 03（3573）1783

発行人 矢野一彌

編 集 原田克子

編集協力 朝 浩之、山谷悦子

印刷所 (有)ゆにおんプレス
TEL 048-834-1201

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

みんなの写真館…………… 32

（姜晋如、新宅久夫）

—— 。 —— 。 —— 。 ——

当協会は、中国ならびに近隣諸国
との相互理解を深め、友好親善・交
流を推進しています。

一般社団法人 国際善隣協会

公開講演会記録

近世以前の日本建築における大陸からの影響

— 英国の建築がヨーロッパから受けた影響を考慮して

モリス、マーティン・ノーマン (Martin N. Morris)

千葉大学名誉教授 (建築史学)



まえがき

皆様に発表する機会をいただき、たいへん光栄に思っております。今回の講演は、千葉大学で同僚であった佐藤建吉先生に大いにお世話になっており、同先生の依頼に応じて行うものです。

今回の発表では、近世以前の日本建築における大陸からの影響、とくに中国からの影響を中心に述べることにし、両国のつながりを追いかける内容で発表することとして準備しました。

これから取り上げる、大陸からの影響を表す建築のテーマとその側面は、

次の通りです。

1. 「家屋文鏡」に見る古墳時代の家屋タイプとその由来
2. 中国の三合院・四合院住宅と古代日本の宮殿と貴族住宅
3. 中国の「都城」と日本の都
4. 中国と日本における店舗を含む住居「町家」から構成される町並みの誕生と展開
5. 日本の寺院建築における様式とその構成要素（特に「組物」）に見る中国建築の真似

上記、五つのテーマは全て、大陸からの強い影響を受けています。それら

を順に話してみます。

しかし、日本建築が大陸から受けた影響という課題は膨大に広く、発表時間などの制限もあり、中途半端にしか理解していない部分もあり、より詳しく語るテーマを二つ選択し、残りについては関わりだけのレベルで述べることにします。

今回は、1. の「家屋文鏡」について、および4. の「町家」に関わる町並みなどについて、重点を置き詳しく検討することになります。また最後には、6. 西洋文明のいわゆる「衛星国家」イギリスが大陸から取り入れた建築様

式を、日本と英国の比較検討のために概要的に紹介することにいたします。

上記のテーマの話に入る前に、全体的に関わりのあることとして、まず、次の2点について述べておきます。

(1) 近世以前の日本建築は、ユニークな側面を当然色々有しているのですが、派生的な側面があることも重要で、両方を認識していないと全体的な理解はできないと思われます。

(2) アジアの一部ながら、中国の大河に当たる東アジアにおける高度文明の重要な発祥地の中心部から離れている日本は、いわゆる「衛星文化」の性格を持っています。朝鮮半島、ベトナム(中国の「越南」)も同様に、中国文化圏の「衛星文化」として捉えられます。また、イギリスもヨーロッパ大陸の「衛星文化」として分類できるので、その観点から、日本の場合との比較は、興味深い側面が多いと思われます。

建築の面における日本と東アジア大陸(特に中国)の類似は、偶然の場合も若干はあるでしょうが、大方は影響を受けた結果によると思われます。こ

れは一部において(特に先史時代において)は、民族の移動と関係して伝播したかもしれないし、また一部においては(それは有史時代となってからと予想されるのですが)、意識的な「もの真似」ではないかとも思われます。意識的な「もの真似」の場合には、例えば、近世以前の日本建築を施工した大工も、その施主である依頼者側も、デザインの良し悪しは、大陸のモデルにどれだけ近づいていたかを判断して、評価したに違いないでしょう。

一方、環境、農業、その延長の文化の基盤ともなる「衣食住」において重大な共通点がつくり出した影響も重要ではないかと思いますが、どれほど意識的であったのかについての判断は難しいといえます。こうして、十分な根拠が不明であるため、また原型のモデルと離れているために、デザイン感覚などの面で、日本で生まれたものとして見られている場合があると思われます。

明治以降では、方向転換が行われ、中国にモデルを求めることを止め、欧米に目を向けるようになったのですが、

その場合も、デザインなどの移入のされ方においては、その徹底性と熱心さは、それ以前の中国真似とよく似ているといえます。

1. 「家屋文鏡」に見る古墳時代の家屋タイプとその由来

それでは、日本における身分社会・国家成立期を出発点に、当時の日本建築の様子を伝える興味深い史料、奈良県佐味田の宝塚古墳内に発見されたいわゆる「家屋文鏡」(4世紀頃、図1)に関して、そこに見るデザインを通して、当時の建築の様子と大陸建築との関連を見ることにします。この銅製の鏡の裏面に、鈕を囲む形で、4棟の家屋を表すデザインが施されています。

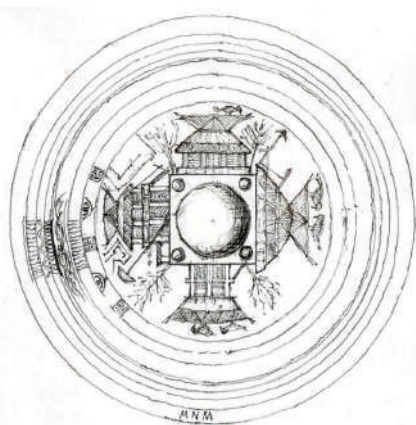


図1 家屋文鏡(4世紀頃、奈良県佐味田古墳出、宮内庁:著者の描き起こし)

時計回りの順番に、その様子と建築史における位置づけについて解説します。

A. 正殿

本鏡では、普通、図では上となっているものは、平側^{ひらがわ}から見た基壇に立つ桁行3間の入母屋造茅葺屋根の建物です。横から見て、両端の破風は極端な外転びがある点が特徴となっています。奈良県の寺口和田1号古墳で発見された同時代の家形埴輪が全体的によく似た形式を見せています。この場合、平側の中央に入口があり、明らかに正面となっています。

発掘調査の結果、群馬県の三ツ寺I遺跡では、古墳時代（5〜6世紀）の堀に囲まれた地方豪族の居館と思われる遺跡において、並行に配置され、板塀に囲まれた二つの区域の一つに、大規模な主屋らしい平地式掘立柱建物の跡が確認され、前に紹介した鏡と埴輪に表現された建造物の実例として充分に解釈できます。この大きな平地の建物を中心に、後ろ（ほぼ北側）の方に細長い付属建物と屋根の架かった大型の井戸があったことが発掘から判明で

きました。大型平地の建物の前（ほぼ南側）の方は、一部を除いて、未発掘であります。朝廷の広場が存在したと推定されています。脇の区域も殆ど未発掘であります。そこに竪穴住居2棟が発見され、付属施設があったと考えられます。

同時代の中国（六朝〜隋）における宮廷の建築は三ツ寺遺跡のものよりもかなり進んでいたと思われますが、四川省の徳陽で発見された漢代の画像付き「磚」^{せん}に施された上層住宅と思われる「庭院」の図を見ると、塀で囲まれた住宅は三ツ寺と似たように、左右に二つの区域に分かれて、左側の区域は中庭を見下ろす主屋と思われる建物を中心とし、右側の区域はさらに二つに細分され、前の方に井戸と竈を備える付属施設が見られ、後ろに物見櫓らしい数階建ての建物がそびえ立っています。主屋は瓦葺の屋根を持って、三ツ寺の主屋よりも開放的で、進んだ技術の建築であります。配置の基本は類似し、日本の居館計画は既に大陸からの影響を反映していたといえます。

技術的なレベルで、三ツ寺遺跡と似た建築が中国の豪族の間で存在したのは、発掘から判断しますと、紀元前1000年よりも前の夏・商時代で、それを代表する遺跡として二里頭宮殿が挙げられます。回廊で囲まれた広場を見下ろす主屋は縁に囲まれた（茅葺屋根の？）平入掘立柱建物でした。「家屋文鏡」に施された第一の建物とそれが建てられたコンテキスト（豪族居館）は既に中国大陸からの影響を表していると考えられます。

B. 竪穴家屋・住居

時計回りに進んで、「家屋文鏡」第二の建物は、特徴からいうと、全体は第一の建物の入母屋造屋根を直接地面に載せた、軸部のない建物に見えます。建物の左側に棒で支えられた面があり、蔀^{しやう}形式の入口、もしくはポーチとして解釈でき、妻側に入口の存在が推定できます。近くに前庭を囲む低い塀と地面に差された小さい傘（住む人の身分の印？）があります。棟の上に鳥2羽が止まっています。この建物は奈良県東大寺山古墳で発見された同じ古墳時代

の剣の家形飾付環頭とデザインがよく似ています。両方は地面を掘って、床を低くした竪穴住居として捉えられます。

竪穴住居は縄文時代から平安時代初期まで、日本において一般人の住居タイプとして広く分布していたことは発掘調査から明らかです。しかし、竪穴住居は日本だけでなく、アジア大陸の北方にも広く存在した家屋形式でした。中国北部にも事例が多く発掘され、西安近くの半坡村では保全状況が良かったため、幾棟かが復元されています。紀元前5000年頃に建てられた半坡の竪穴式家屋には、4本柱の構造体に支えられた地面まで葺き下ろされた入母屋造屋根と突出する入口通路・ポーチを備えたものもあり、家屋文鏡の第二の建物と形式的によく似ています。

C. 高床米倉

さらに時計回りに進んで、第三の建物は、平側から描かれた桁行2間の建

物です。外転びの破風を持つ茅葺の切妻造屋根を備えた、人が下を歩けるぐらゐの高床の建築です。妻側に2階へ上がる梯子らしいものが描かれています。高床下の2間分に網代壁、または簾らしいものが入っており、床の上では、柱の間は板壁となっているようです。この建物は伊豆北部の韮山町の山木遺跡の出土品を参考に静岡市にある弥生時代の登呂遺跡で復元した米を保管する高床倉庫によく類似し、米倉の表現として広く解釈されています。古代において、高床の倉庫は食べ物だけでなく、唐招提寺の経蔵と宝蔵や東大寺の正倉院など、残存する校倉の例から明らかのように、貴重品の保管にも利用されていました。

高床倉庫も、やはり、日本に限るものではありませんでした。中国雲南省とベトナム北部に紀元前6世紀〜2世紀ごろ栄えていた「ドンソン文化」の遺跡から、青銅からできた高床倉庫の模型が発見され、人が校倉に食料を保管しているレリーフ彫刻もあります。時代が下がりますが、ジャワ島にある

8世紀のボロブドゥール遺跡の彫刻にも、登呂遺跡の復元のようにネズミ返しを備えた切妻造の高床倉庫が表現されています。高床倉庫は南中国から東南アジアに広く分布した建造物でした。稲作農業との関係は重要でしたが、実は、縄文時代の日本にも、高床倉庫と思われる建造物の形跡が発見され、さらに調べると、竪穴住居同様、シベリアにも存在しました。また、ロシアとフィンランドに分布する民族の間にも食料を納める木造の高床倉庫が存在します。西ヨーロッパにおいても、高床の穀物倉庫 (granary horreo espigueiro) が古代から近世まで建てられ、支えの柱と本体の間にネズミ返しを備えていました。

特に興味深い事例はイベリア半島北部 (スペイン北部のガリシア地方とポルトガル北部) に残っています。建物全体が石造で、屋根は瓦となっており、ネズミ返しを備える切妻造の単純な穀物倉庫は、弥生時代の登呂遺跡のものと類似する点が認められます。ケルト民族と関係があるといわれ、ロー

マ時代まで遡ると思われる (horreo という言葉はラテン語の horreum つまり穀物倉庫を語源としている)。というのは、2000年以上も前から、ネズミ返し付きの高床建築（柱の上に載せる巨大な箱）を農業社会の基盤的な食べ物、穀物や稲を保管するために利用することはヨーロッパから極東まで共通していました。

日本では、登呂遺跡や山木遺跡で見された弥生時代の倉庫が後の伊勢神宮の高床社殿建築の発展に関係が深いと思われる、伊勢における最も原始的な高床建物、外宮の御饌殿は、詳細を見ると、高床倉庫からのルーツを忠実に反映しています。

D. 鳥居、トラナ（インド、サンチ）、櫺星門（中国、北京）

話が神社建築に流れましたが、神社境内の入口を表す鳥居にも、大陸に前例かと思われる興味深いものもあります。鳥居には幾つかのタイプがありますが、共通する特徴として、扉がない神聖な空域の入口を表す原始的な構造物です。アジアにおける最古の残存例としては、

インドにある紀元前3世紀のサンチのストゥーパに紀元前1世紀に加えられた塀（ヴェディカ）に設置された入口、トラナがあります。2本の柱と三重の貫らし

根のない低い台が置かれ、その上に傘が載せられています。これは当時大君・天皇に使用されたとされるいわゆる高殿という楼閣の表現と思われます。安康天皇の代、「目弱王」は天皇がくつろいでいる「殿の下に遊べり」などと『古事記』に高殿の存在を暗示する場面もあります。

また、中国に目を向けると、北京において紫禁城の南東に位置する天壇園丘の区域（明、清代）の入口として、

家形埴輪においても、この第四の家屋とたいへんよく似たものが、大阪府美園遺跡などから出土されています。

櫺星門と呼ばれ鳥居とよく似たような石造の構造物があります。これは、サンチのトラナと同様に、原型は明らかに木造です。こうして何よりも日本的と考えられていた鳥居でさえ、アジア大陸の宗教建築とつながりがあるようです。

中国では、楼閣は戦国時代の青銅器に施されており、上の階で権力者が参加する儀式が行われ、下の階で音楽団が鐘などの楽器を鳴らしています。

E. 高殿、楼閣

家屋文鏡に戻り、最後の家屋を見てみましょう。前の倉庫と同様に、これも2階建ての建築ですが、2階の周囲に欄干付きの縁が巡り、妻側から欄干付きの階段で登るようになっています。平側から見られる桁行3間の家屋で、屋根は最初の建物と同じ入母屋造になっている、下の階の柱の間に簾らしいものが入れています。入口と逆側に屋

また、時代が下がりますが、朝鮮半島において、宴会用の楼は19世紀まで朝鮮王宮に設置する建造物タイプとなっていました。現在、ソウルの宮殿において、19世紀に再建された慶會楼と呼ばれている大型の宴会用の楼閣（「高殿」）が保存されています。上の階が宴会の空間で、階下は食べ物をそろえる準備空間として利用されました。日本の内裏において、床が特に高い紫宸

殿はこのような楼閣の性格を生かしているのかもしれませんが。朝鮮の王宮において、19世紀まで残っていたのは興味深いと思われます。

日本が政治単位として成立したと思われる古墳時代の家屋文鏡の建築を見ますと、四つの家屋すべてがアジア大陸の建築類型につながりを持つと見られ、日本は出発から、大陸と離れて理解できない文化であったことを建築の観点からかなり説得できます。

2. 中国の三合院・四合院住宅と古代日本の宮殿と貴族住宅

有史の時代に入ったら、大陸文化との縁が間違いなく続いていた。建築領域におけるその展開をいくつかの観点から指摘します。まず、平安時代に具体的な配置が詳しくわかる最上層の住宅である内裏の場合、その正殿に当たる紫宸殿と正面の前の脇屋に囲まれた中庭の「コの字形」構成に古代からの中国の住宅の基本形の一つ、三合院・四合院からの強い影響が認められます。また、平安時代において、貴族

の間に利用される寝殿造の住宅も、三合院の構成を基本としていたとされます。ただし、実際にその左右対称の原型から離れる傾向が目立ち、その後の書院造において出てくる左右非対称の雁行型家屋の配置に日本の独自性が表面化してくると捉えられています。

また、板床に畳を敷き、それを計画モジュールに利用する書院造は日本建築の独自の側面と思われますが、木造住宅に高さ2尺〜3尺の板床を設置し、それを生活面にする概念は朝鮮半島、ベトナムと東南アジアにおいて、特に椅子が普及せず、床生活が続いていた地域の伝統住宅にもよく見られます。漢代までの中国も床生活を基本としていました。とすると、独自の言いながら、日本の住宅建築も、大陸と切り離してしまうと、全体がつかめないと思われる。

3. 中国の「都城」と日本の都

建築の集合体ともいえる都市を取り上げると、やはり、大陸、特に中国からの強い影響が認められます。日本最

初の都市とされる古代の都、藤原京、平城京、平安京はともに中国の都城を意識的にモデルにしていたことがよく知られています。規模的にはその3分の1ぐらいしかなかったのですが、構成的に、平城京と平安京はともに隋・唐の長安城とかなり類似します。奥の中央に宮殿と政治機関を置き、都城の入口から、宮殿の入口まで幅の広い1本の軸線道路、朱雀大路を通して、都市を左右対称に、二つの区域に分けていました。中国においても、日本においても、政府により一氣に作られた計画都市でした。

この場合、日本が中国を意図的に真似たことは当時の記録から明らかです。中国の政治制度をモデルとする日本は、政治の舞台として、中国の政治都市に基づく首都も必要と感じて、造ったのでした。徹底した合理性で、右京も左京も南北東西の大路と小路を通すことで、碁盤上に配置されたアーバン・ブロックに分けて、最小限のユニットとして、400尺四方の町が設置されました。おおよそ80町分を占めていた大

内裏を除くと、平安京は1136もの「町」から構成されていました。12町分を占めていた市場、8町分を占めていた神泉苑、4町分を占めていた二つの仏教寺院や大学寮、2町分や1町分を占めていた身分の高い役人（貴族）の邸宅が大きな囲いとして存在しました。それらを除くと、残りはレベルのより低い役人の住宅として細分されたか、あるいは、都に集められた職人や労働者の宿泊に用いられたのでした。

この身分による敷地規模の与え方は、藤原京および平城京において既に存在し、平安京においても続いていた。平安京では最も細分された場合の典型は、いわゆる四行八門の形式で、およそ100尺×50尺の「戸主」32個に分かれていました。文書と（特に平城京においての）発掘から都城の様子が浮かび上がります。

大路に直接に面する建物は門以外にはなく、人をかなり超える高さの築地塀がそれぞれの区域を囲っていました。身分に合わせた形式の門を通して囲いの中へ入り、そこに建物が立っていました。

した。小路なら、築地塀ではなくて、板塀の場合もあったのですが、建物が道に面したのではなく、囲いの中に独立して立っていたのがほぼ普遍的なことであったと思われます。この点は、長安城など、唐代までの中国の都城の様子に基づいていました。

4. 中国と日本における店舗を含む住居「町家」から構成される町並みの誕生と展開

平安京の創立からおおよそ750年の後、戦国時代の日本の都の様子を有名な「洛中洛外図屏風」（図2）が鮮やかに伝えています。寺院や邸宅、築地塀に囲まれた施設も少なくないのですが、大通沿いに軒を接する商人や職人が住む町家が立ち並び、道に面する店舗が開かれ、にぎやかな街になっています。このように町家から構成された町並みは古代の都と対照的で、その出現が日本の中における市場経済の発展を反映する現象として捉えられています。このたいへん大きな変化がどのように行われたのか？ 創立期の都に、町

家が存在したのだろうか？

平城京に8世紀前半にあった長屋王の大邸宅の発掘から、従属人の宿泊施設として建てられた長屋が発見されました。奥行き2間の母屋の南側に庇が付く16間の建物は恐らく桁行方向で、8つの住房に細分されたのです。よりしっかりとした建築になっていたものの、法隆寺、薬師寺など、同時代の寺院において、僧侶が住んでいた僧房も似たように、長屋形式になっていました。



図2 洛中洛外図屏風に基づく戦国時代京都町並み復元模型（国立歴史民俗博物館：著者による写真）

法隆寺の東室と妻室が現存し、この類の建築の様子を伝え、庇付きの大房と母屋のみからなる小子房が平行に立ち並び、自分の高い僧侶とその面倒を見る童の宿泊施設を成していたと思われる。なお、その延長で考慮すると、古代の都に、特別な技術を持っていた職人集団に所属した人たち（鋳物師、大工など）や地元から都に行かされた労働者は多かったことが知られています。

おのおの都における宿泊形態について、情報が限られています。400尺×400尺の町という、築地塀が巡らされた囲いの中に住んでいたはずです。もしかすると、町（「ちょう」）を「まち」（「待ち？」）とも読めるのは、仕事をしていないとき控える場所を兼ねて宿泊の場所になっていたためとも考えられます。「町」の中に住んでいた人たちに与えられた宿泊施設の多くは長屋であった可能性が高いと思われます。そうすると、平安京の場合の「町」の規模から予想すると一つの町に、おおよそ4棟〜6棟の長屋が平行に並べることは可能と推定します。

長屋と長屋の間の空間は町内の通路になったとも推定できます。規模は異なったかもしれませんがこの囲まれた町の形式は唐代までの中国にも存在したと思われます。つまり、平城京と平安京の前例となる長安城も大路と塀で囲まれ、門を通して入る町からなっていました。町の中に、一般の労働者と色々な職人集団も住んでいたはずで

す。中国では、唐代後の宋王朝の時代になると、市場経済が著しい発展を見せ、都市において大きな変化をもたらしたと思われる。本来、宮廷や行政（つまり公の組織）の依頼に対して、ものの作成・生産を行った職人集団は、宋代になると、お金で支払える相手と契約を結ぶようになり、商売が盛んに行われるようになりました。その過程の中で、木戸のようなものが一部は残るものの、町を囲む外壁・塀などが廃止され、町家が直面する町の中の通路が商店街化してしまっただと考えられます。中国における、*shophouse* が構成する町並みの誕生であり、その様子を12世紀に張昞端により描かれた有名な絵

巻「清明上河図」において確認できます。北宋の都城、開封府を表す貴重な絵画史料です。

日本の「都城」、京都にも、12世紀に町家で構成された町並みが出現したことは「年中行事絵巻」や「伴大納言絵詞」など、当時の絵巻物から明らかです。町を囲む築地塀が除かれた結果、町内の通路とそれに面する長屋が町並みになった場合と、施設や邸宅を囲む築地塀の外側に長屋が建てられた場合がともにあり、大路を占領する町家増加の結果、都の広い大路の幅が狭くなった原因になったとも推定できます。中国で起きた町並みの変化は日本でも生じ、町家が立ち並ぶ町並みが次第に現れたことは確実に、中国からの影響も考えられますが、興味深い相違点として指摘できます。

「年中行事絵巻」と「伴大納言絵詞」から判断すると、日本の都の大路沿いの長屋風の町家は「清明上河図」で見られる店舗の機能を果たさず、低層役人、舍人や貴族の従属人の住まいになってしまいました。「年中行事絵巻」に

店棚を持つ家屋は2件だけです。つまり、12世紀の平安京の場合、道はまだ殆ど商店街になっていなかったのです。

中世を通して、次第に日本における市場経済がさらに発展し、日本にも店舗を備える町家が立ち並び、商店街を構成するようになり、16世紀に描かれた初期の「洛中洛外図屏風」から判断すると、それが都において本格的に成熟したのは戦国時代であったと考えられます。

「年中行事絵巻」が描かれた12世紀の日本では、店舗を備えていない町家風の住居を長屋のように都の大路沿いに並べる様子を中国の影響によるものとしたら、日本の場合、それは中国のような市場経済の発展によるのではなく、単に、中国における町並みの変化の認識と中国最新の町並みの様子を真似したいとの意識にあったのではないかと推察できます。

その後の日本における町家の発展を見ます。その中で重要なのは、中国の町家の建築的特徴を意識し、真似した証拠として、舟木家本「洛中洛外図屏

風」など、桃山時代の屏風が挙げられます。そこでの町家の多くは、16世紀中期までの「洛中洛外図屏風」にある平屋とは異なり、総二階の建築であり、しかも、二階は跳ね出し二階になっています。さらに屋根の面より高くなり、正面でも突出する「ウダツ」が目立った特徴になっています。

このような様式は、豊臣時代の京都の特徴と思われ、江戸時代に入ってから、京町家から次第に消えてしまったようです。しかし、江戸後期・明治時代の中部地方、特に長野県における中山道の宿場町などの町家においては、なおそろえていた特徴であると指摘できます。その理由は推定ながら、秀吉が豊臣政権の首都として京都を印象的にしようとし、その中で特徴的な2階建ての町家の建設を進めましたが、徳川幕府は、町家の外観に対して厳しい態度を取り、道を見下ろす本2階をほぼ禁止（かなり広い範囲において、江戸時代中期まで、虫小窓を正面につけた物置程度の「厨子2階」だけが許された）したからと考えられます。

ルールに従ったところも多いとは言え、無視するか、あるいはルールを調節し、町家に印象的な外観を生かせたところもありました。そのような過程で、中山道の奈良井宿の町家の正面の構えに、桃山時代の京都の町家の様子が生かされたと推察できます。

この中においても、中国大陸からの影響があったのか？ 中国における江南水郷町の古い家並みや安徽などの歴史的町並みを見ると、跳ね出し2階と大きな「ウダツ」を特徴とする家屋が多く、しかも、特に「ウダツ」について、その影響はベトナムの首都、ハノイの旧商人地の家並みにも認められます。豊臣政権の京都に最初に日本の町家に現れたと思われる跳ね出し2階と「ウダツ」は、日本に生まれた「様式」ではなく、そのルーツは中国にあったと推測できます。

ちなみに、この点については、中国で話をとどめてよいとは言いいきれないかもしれませんが、なぜなら、道に面するこのような店舗を含めた商人の家屋は中国文化圏だけでなく、長いシル

クロードの西端、ヨーロッパにも中世から存在し、その中で、跳ね出し2階は広い範囲において特徴となっており、私の母国イギリス、フランス、ドイツ、東ヨーロッパ、バルカン諸国、トルコなどにもその例が現在も残っているからです。

また、平面構成の側面から見ても、日本の町家とイギリスの Merchant house を比較すると、共通点が認められます。ここで一つの共通する事例だけを紹介します。イギリス西部の町、テュークスベリーに残存する貸家として、15世紀に地元の修道院によって建てられた長屋形式の商人住居です。16戸からなっており、それぞれのユニットが同じ3室構成を持っています。表の部屋は道に面する店で、その後ろに地炉を備えた居間、その奥に物置があります。三つの部屋は片側通路によってつながっています。居間は、炉の煙を出すため吹き抜けになっており、軒下にある連子窓が煙だしの役目を果たしています。店の上だけに2階が設置され、根太の両端は居間と道にそれぞれ

れ跳ね出しになっています。この2階部屋は夫婦の寝室に利用されたと思われる。

意外にもこの構成は、近世の通り土間を備える1列3室の典型的な京町家とよく似ています。2階の扱いは近世町家の控えめの厨子2階とは異なるのですが、秀吉の時代の京町家と共通しているともいえます。偶然の一致でしょうか？ 似た道沿いに並ぶ結果から生まれた共通点からでしょうか？ このように片づけてよいとしても、共通する社会・経済的環境の存在を暗示しており、意義深いと思います。

5. 日本の寺院建築における様式とその構成要素（特に「組物」）に見る中国建築の真似

日本の歴史的建築における大陸からの影響については、さらに多くの側面が残っています。大雑把にはなりますが、下に項目①～④として列記します。が、古代日本における最も位が高い建築、すなわち宮殿の中心的な要素に当たる朝堂院と大極殿および仏教寺院の

金堂などの建築は、形式と詳細において中国をモデルとしました。

中世になると、宮殿の中心的大ホールの建設を止めることとなったのですが、宗教建築において、中国の建築様式を意識的に利用することは続き、他の建築類型（例えば門、神社の一部）においても、中国からの建築要素・詳細などの利用が続きました。また、仏教寺院において、中国に残っている事例よりも古い中国・大陸様式の建造物が（例えば、法隆寺や唐招提寺において）残っており、歴史的にも文化的にも、アジア全体の建築史において極めて貴重な存在となっています。

日本の仏教建築史の発展を大陸様式の利用の繰り返しとして下記のように概説できます。

①古代において：飛鳥時代～奈良時代の宮殿と寺院建築（白鳳様式や天平様式とその延長で、平安時代を超えて、中世におけるいわゆる「和様」としてまとめられます）。

②平安時代における浄土信仰を伴った様式（建築の詳細よりも、建物の配

置と池・庭園との合わせ方：残存例として、宇治の平等院）。

③中世において挿入される宋の様式、大仏様、禅宗様。④近世において：黄檗宗の寺院に見える中国の明代と清代の様式。

計画から詳細にわたり、それぞれの展開、純粋な様式としての扱いと適当な折衷的な当てはめまでを語ることは、今回与えられた時間と枚数をはるかに超えており、ここでは割愛させていただきます。

むすび

むすびにあたり、簡単に述べておきたいこととして、大陸文明との関連から見て、日本は西洋文明の衛星国家とも捉える列島、私の母国イギリスとよく類似する側面があり、イギリスの文化史および建築史を見て、日本の場合と比較すると、興味深い共通点に気づきます。したがって、西洋文明のいわゆる「衛星国家」イギリスが大陸から取り入れた建築様式を比較検討のために概要的に紹介します。

11世紀から、英国に連続して登場する最も正式な建築様式（ロマネスク、ゴシック、イタリアのルネサンスを通して入った古典様式）は、全部が大陸のほうから伝えられたものでありました。これらの様式は、進んだと思われた大陸文明（あるいは、さらに昔の地中海の古代文明）の領域に所属する、あるいは所属したい強い意志の表明として理解すべきと思われます。日本の中国文明に対する憧れとよく似ているといえます。

ただ、英国内の活用において大陸から導入した様式には、独自の側面がすぐ現れ、地域らしさの表現となったりしました。それは、日本の中国真似の場合にも認められる現象でもありました。様式として定義できるものだけでなく、例えば、前述した道沿いの店舗を兼ねた住居形態などもヨーロッパ大陸の文化圏との共通点も認められ、その意義を考慮することも重要と思われます。

人類の様々な文化や文明のつながりと関連性の整理はまさに人類の本質と

して、これからいかに進めてよいかを考えようとするときに注意深く検討すれば、大いに参考になるものに違いありません。同様に、恐らく現在では、それぞれの文化圏に関して、膨大となっているそれぞれの段階と側面（様式など）についても、収集したデータを注意深く検討すれば、今までなかった全体像をかなり忠実に把握できる機会を与えるのではと考えます。

長くなりましたが、今回の発表を行う機会を与えていただき、改めて、深く感謝いたします。また、本報告の提出まで、長い間お待たせしましたことをお詫びいたします。

（2022年5月26日・オンライン公開講演会）

筆者略歴 (Martin N. Morris)

ケンブリッジ大学建築および美術史学部卒業、修士。その後来日し、東京大学大学院で工学修士、工学博士（1995年）。千葉大学工学部および大学院で講師、助教授、准教授、同教授、2022年3月定年退職。



(思川桜)

「桜校長」高松祐一をめぐる桜

細川呉港（会員）

① 佐野藤右衛門と牧野富太郎

高松祐一（昭和十三年生まれ、八五歳）この人を紹介するのはなかなか難しい。栃木県宇都宮の中央女子高等学校の先生をしながら、桜に入れ込み、さまざまな「桜ドラマ」をつくってきたからである。生家に近い羽黒山の麓にあった野口雨情の晩年の家の庭から、ひととき変わった美しいしだれ桜を発見。日光植物園の久保田秀夫（研究員）に持ち込んだ。これが後に新種の「雨情しだれ」となる。また東京の成城学園にいた水上勉の庭から、「太白」に似た白い大きな花の桜の枝を持ち帰り、「水上桜」と名付けて高校の庭に植えた。

た。それが縁で水上が学校に講演に来てくれることになった。また久保田秀夫が小山市の修道院の墓地から作出した新種「思川桜」を小山市の「市の桜」として登録するよう運動もした。「桜校長」高松祐一は国語の先生であるとともに詩人、文学者でもあった。のちに校長になる。その歩んだ道はまこと教員らしい、地道に、ひたすら自分の学校と宇都宮、ひいては栃木県のためにつくしてきた生涯である。それに文学に精通している。人を見る目が極めて深い。人間の機微を知っている。取りあえず桜だけを中心に彼の人生の歩みを紹介しよう。

高松祐一は生まれたときから身近に

桜があった。明治四十一年宇都宮に第十四師団ができ、師団司令部と歩兵第五十九連隊、歩兵第六十六連隊、野砲兵第二十連隊などと、宇都宮駅を結ぶ広い「十間道路」が市内を貫通して造られ、道の両側には桜が植えられた。高松が小学生のころ桜は最盛期、毎年行われるお花見は、それはそれは賑やかであった。

今では、工場の誘致や、都会の大企業を町に呼ぶことが「町起こし」の定番となっているが、そのころは町に師団を誘致することが、当時の町起こしの一番の目標だった。前に拙文でも書いたように、越前高田も、第十三師団を町に呼ぶことに町長が奔走した。そ

して師団の周囲（高田城）に桜を植えた。いまでは夜桜百万人といい、夜桜では日本一という名所になっている。

宇都宮の市内の2キロに及ぶ十間道路に、千本の桜、ソメイヨシノを植えようと提案したのは、鮫島重雄師団長（陸軍中將）ということになっている。

そのころは師団長といえば子どもたちのあこがれの人であった。宇都宮市長を始め河内郡の郡長も協力して桜を植えた。

高松少年の家は、その軍道のすぐそばにあって、子どものころから花見の季節は盆と正月が一遍にきたようなものだった。たくさん露店が出て軍道は人であふれ、サーカス小屋や、お化け屋敷のようなものでできた。大きな樽の中でオートバイがくるくる回る曲芸もあった。休みの日は少年たちは一日中桜の軍道で遊んだのである。道の両側から桜が覆いかかりまるで花のトンネルのようだった。

昭和四十三年（一九六八）高松は宇都宮中央女子高等学校に国語教師として赴任、ちょうど三〇歳であった。そのころからいろいろな桜の本を読み、

桜に関する新聞記事に注意して読んだ。

その中に特別高松が感動したのは、長年牧野富太郎と付き合ひのあった京都の桜守、佐野藤右衛門（十五代、桜守二代目）の話であった。

佐野藤右衛門は、言うまでもなく京都で代々続いた植木屋。もとは仁和寺の舎弟だったらしい。十四代目から主として桜を育てるようになる（現在の藤右衛門は十六代、桜守三代目）。

十四代藤右衛門は大谷光瑞の命を受けて、全国にある歴史やいわれのある桜や、名だたる桜を求めて枝を分けてもらい、京都の自分の桜畑さくらばたに持って帰り、接ぎ木や接ぎ芽をしてその種が絶えないように努めた。息子の三郎、五郎に、植木屋としての仕事を任せて、全国の寺や、庭園、神社などを何年も行脚したのである。その執念は並々ならぬものがあつた。何しろ、門徒が何百万人もいる浄土真宗本願寺派第二十二世法主ほすのお墨付きを持って全国の寺を回ったのだから、寺も神社さえも協力を惜しまなかった。

十五代藤右衛門・桜守二代目（三郎）

は、父親の跡を継ぎ、やはり名桜を集め、また父親の集めた桜を育てた。また大谷光瑞から、中国からヨーロッパにつながる鉄道を想定して、その沿線に桜を百万本植える計画を聞き、苗木の大量育成に励んだ。昭和十六年（一九四一）には軍の仕事で、上海に2千本の桜を植えに行ったこともある。

昭和十九年、折から戦争が激しくなり、食糧がひっ迫したとき、軍から強制的に食糧増産を迫られ、せっかく植えていた桜10万本のうち3万本を寄付、残りは切り倒した。ただし先代が集めた名桜のうち70本だけは密かに残した。「桜を切るのも国のため、（名桜を）残すのも国のため」と藤右衛門は言ったという。

また十五代藤右衛門は、陸奥の国の塩釜桜の蘇生をしたり、京都御所の左近の桜を接ぎ木で残したり、接ぎ木した金沢兼六園の菊桜が枯れたのち、再び穂木を育てて移植したりした。晩年は、財団法人「日本桜の会」の評議員を務め、日本画家、堀井香坡の175種の図譜である『桜』（一九六一年）を刊行、『桜花抄』（七〇年）、『桜守二代記』

(七三年) などの手記も本にしている。その十五代藤右衛門は牧野富太郎と親交が厚く、牧野は桜畑のある広沢の池の畔にある藤右衛門の茅葺の家に、何度も足を運び、何日も泊まって桜の話に花を咲かせた。

昭和三十一年暮れ、牧野は病床にあった。九五歳だった。藤右衛門は京都から列車で上京し東京の牧野の自宅に見舞う。藤右衛門が訪れたとき、牧野は寝ていたがそのうち目が覚めて、藤右衛門を認め、弱々しい声で言った。わざわざ京都からよう訪ねて来てくれたと礼を言い、かつ「佐野さんの鳴滝なるたき(京都)の桜畑から出てきた山桜の変わり種はその後どうなった？」と尋ねた。藤右衛門は持っていた鳴滝の桜の畑で山桜の実生みしょうをたくさん育てていた。長い時間をかけて、より良い桜を咲かせるために、選別を繰り返しは種子を蒔くのだ。桜の種子を蒔き、花を咲かせてから実を採り、また種を採る。気の遠くなるような話だ。親の代から何十年も続けている。その1万本の中から、色のやや赤い、八重の変わり種が出てきたのを牧

野はよく知っていたのだ。山桜は本来一重なのに、これは花びらが多いものは15枚、旗弁きべんは2、3個あった。つぼみは濃い桃色、花は薄い紅色である。

「はい、元気で育っています」と藤右衛門は答えた。

「そうかそれはよかった。あの桜はな、あんとと先代の藤右衛門さんと二代かけて長い間桜に打ち込んできた、その努力に対して、天からの贈り物じゃよ。これからはその桜を《佐野桜》と呼びなさい。私が名付け親じゃ」。

藤右衛門はびっくりした、自分は一介の植木屋である。自分の名前の付いた桜など、考えたこともなかった。めっそもない。しかしここで言い争いはいできない。ベッドの中の弱った牧野の顔を見ているだけで、藤右衛門は目の前で、はらはらと涙を落としたという。長い付き合いの牧野富太郎の、佐野藤右衛門親子に対する最後のプレゼントだった。牧野はそれからわずか27日後にこの世から消えた。

この話を、高松祐一は新聞で読み、感激した。それですぐに京都に行き、

佐野の桜畑を訪ねた。そして何とかその「佐野桜」を分けてくれと頼んだのである。突然の知らない人の訪問に佐野は驚いたが、熱意にほだされて数少ない苗木の中から「佐野桜」を1本贈呈した。高松はその苗を大事に宇都宮に持ち帰った。そして翌年、新たに赴任した宇都宮中央女子高等学校の庭に植えたのである。桜好きの高松にとって、宇都宮中央女子高等学校は好都合だった。もと宇都宮第十四師団が、大正の軍縮の後、廃止になり、練兵場の南にあった歩兵第六十六連隊と五十九連隊の跡地のうち、西側の六十六連隊の跡が栃木師範学校となり、さらに、宇都宮中央女子高等学校となっていた。何と敷地は2万坪もあった。桜を植えるところはふんだんにあった。

高松はまた昭和四十四年と四十五年の卒業生の記念植樹の費用を2年分貯め、佐野藤右衛門のところから30本の桜を購入。その後財団法人「日本花の会」の援助で桜の品種をどんどん増やしていった。そのようにして宇都宮中央女子高校には少しずつ桜が増えていっ

たのである。しかも桜の好きな高松である。ソメイヨシノはかつて軍道の桜の名残と思われる古木が校庭の角に1本あったが、後はみな珍しい桜ばかりを収集した。一時は百種、150本もあった。

これだけの種類の桜が1か所にあるところは全国でも少ないと思われた。

昭和六十年（一九八五）には「日本さくらの会」より「さくら功労者」として学校が表彰を受け、美智子妃殿下よりお褒めの言葉を賜った。中央女子高校は、「桜の学校」として全国的に有名になったのである。

高松はその後、栃木県下の佐野市に、「佐野桜」を市の花とするよう佐野藤右衛門と、牧野富太郎の逸話を書いて働きかけたが市役所の反応はなかった。当時、佐野桜は栃木県ではあまり知られていなかった。高松は京都から持って帰った桜を、もちろん宇都宮中央女子高校に植え、さらにそこから増やして佐野市文化協会にも数本送っておいだ。その桜をさらに佐野高校の実習助手の人が、接ぎ木をして少しずつ増やした。のちに分かったところによれば、

佐野市文化協会設立五周年記念には、佐野市の田之入公園に何と39本の佐野桜が植えられていた。少しずつ、佐野市民が、「佐野桜」に関心を持ってくれることに高松は喜んだ。

宇都宮中央女子高校の「佐野桜」は高木となり、今では東京の神代植物公園にも、北海道松前の桜見本園にも、全国あちこちに植えられている。牧野富太郎と代々続いた桜守、佐野藤右衛門の涙の桜である。

② 思川 桜と久保田秀夫

もうひとり桜に入れ込んだ先生がいる。日光植物園の久保田秀夫である。

長野県塩尻の片丘小学校の校有林・庫裏平（高ボッチ）で桜の新種「片丘桜」を発見した久保田秀夫は、小学校教員。その後松本に転動したが終戦を境に、日光の植物園に転身した。それまでも、南アルプスでサンブク・リンドウや、クボタ・テンナンショウなどの新種も発見していた。

久保田秀夫は大正二年（一九一三）生まれ。昭和八年、長野市の長野師範

学校の時代、傍らにあった長野聖公会の聖救主教会に通い始めた。日本でも最も古い赤レンガの趣のある教会だった。日本聖公会はイングランド国教会より起こった宗派で、カソリックとプロテスタントの中間のような教会。社会とのかかわりを重視し、さまざまな奉仕活動をしている世界的な団体である。日本では立教大学や桃山学園、清里のキープや大磯のエリザベスサンダースホームなどにかかわっている。

久保田は昭和二十三年、日光に来て、翌年日光の聖公会の真光教会しんこうの教籍に入っている。東京大学付属の日光植物園で研究と仕事をしながら、教会に通った。教会はジェームズ・ガーディナーのつくった石造りの重厚な建物で、明治八年から礼拝が行われたといわれている。この教会に、栃木県南部の小山おやまにある小山修道院の桜井健という司祭が月に2回ほど説教に来ていた。久保田は桜井司祭とすぐに親密になった。そして小山修道院（のちに日本聖公会小山祈りの家）の話を聞く。その修道院の庭に、墓地があるという。久保田はす

ぐに五歳で亡くなった長男詔夫のりおの遺骨をそこに埋葬することにした。小さな墓石の並ぶ、きれいな墓地である。久保田が「片丘桜」を発見したところに、久保田夫妻にとって初めての子どもが生まれる。小さなときから桜の絵を描き、また片丘桜の苗木のまわりに、きれいな花が咲くようクレヨンを埋めたという逸話を持つほど、桜の好きな子どもだった。夫妻はとりわけ詔夫をかわいがったが、突然流行の疫痢にかかって亡くなった。五歳だった。国立科学博物館の大井次三郎がわざわざ片丘桜の学名に「ノリオイ」と、久保田の子どもの名を入れてくれたのはそのためである。

久保田は何度か、小山修道院の我が子のお墓にお参りに行った。小山市の真ん中を思川おもいがわが流れていた。その河畔に修道院があった。その墓の周りに珍しい「十月桜」が植えてあった。

小ぶりの花だが十月とそして春にももう一度、年に2回咲く八重の桜だった（同じ仲間の冬桜は、一重である）。

昭和二十九年（一九五四）ころ、あるとき久保田は亡くなった息子の話を

桜井司祭に話し、かつその墓の周りにある「十月桜」の種子が実ったら、拾ってきてもらえないかと、頼んだ。桜井はすぐに了解し、しばらくして日光の教会に3粒の種子を持ってきてくれた。

久保田は喜んで、その3粒を庭に蒔いた。やがて芽が出る。そして5年が過ぎた。3本はそれぞれ花を咲かせたが、そのうちの1本はほかの2本とは違った花が咲いた。それが驚いたことに親の「十月桜」とは似ても似つかない、美しい華やかな桜だった。「十月桜」が白っぽく小輪八重なのに対して、花びらの数は少ないが花の大きい中輪半八重、それに花がかたまつて咲くので美しく見えた。花の色は薄紅紫、花柄かへいは3センチもある。そして花が垂れ下がったように咲く。姿かたちがいい。枝が横に張る。一目で印象的な桜であった。

私も5、6年前こうした発見の経緯を知らないまま、偶然神代植物公園で、小ぶりの思川桜の木を見つけ、その独特な可憐な雰囲気の花を印象深く見た覚えがある。桜は自家受精をしないので、実った種子は必ずほかの桜の木と

の混血である。だから新種が誕生する。その後、久保田は、その花を当時は結城ゆうぎではなく、小山にあった「日本花の会」の桜農場に持ち込む。そのころの農場長は志村長蔵だった。志村はそれを接ぎ木や挿し芽によって増やした。名前は、修道院の横を流れる川の名前から「思川桜おもいがわ」とした。

「雨情しだれ」を日光植物園の久保田秀夫に持ち込んだ、くだんの宇都宮中央女子高校の桜校長こと高松祐一は、久保田から思川桜の謂れを聞き、すぐに小山市に思川桜を市の花にするよう提案した。もちろん学校にも植えた。久保田先生の息子の眠っている小山修道院の「十月桜」から誕生した桜である。思川は、小山市の真ん中を流れる川だし、市民にもこの名前なら親しんでもらえると考えたのである。すると小山市の市の担当職員が、宇都宮女子中央高校に思川桜を見に来て、その美しさに感動し、さらに学校の標語である、お互いが「思い思われる」をモットーに生きる――をそのままキャッチフレーズにして、市の会議にかけた。

そして昭和五十三年（一九七八）めでたく小山市の花として制定されることになった。久保田が、桜井司祭から種子をもらって蒔いてから、ほぼ23年後のことであった。その後思川の両岸、観晃橋を中心^{かんこうばし}に3千本、「思川桜」は市内のあちこちに植えられた。当時の大久保寿夫市長のアイディアで、桜の「里親」制度を作った。市民に1本3万円を支払ってもらい、苗木を植え、名札を付けて、以後その桜の面倒をその里親にずっと見守ってもらおうというわけである。この方法はその後各地で実施された。荒川の土手の桜の復元を目指している江東区も、また台北の慶泰大飯店の裏の中吉公園でもこの方法で桜を増やしている。私自身も、栃木に行く途中、偶然に、思川の河川淵で、桜並木を見た。今ではわざわざ小山市の思川桜を見に来る桜好きの人も増えた。

③「四季桜・花しずく」と「四季桜・花宝」

「桜校長」こと高松祐一にはまだま

だ桜に関するエピソードが多い。

高松先生はもちろん酒が好きであった。ある日のこと、いつものようになりみの居酒屋で酒を飲んでみると、自然と話が桜のことになった。何しろ、自分の勤務している学校の校庭に、150種類もの桜を植えた人である。桜に関して知らないことはなかった。

もともと宇都宮には、「四季桜」という酒があった。地元の宇都宮酒造という酒屋が以前から造っている酒である。だがこれがなかなか売れなかった。客は越後の酒ばかりを注文し、四季桜は店ではなかなか出ないのだという。売れないときは樽ごと、秋田とか別の酒屋に売らなくてはならなかった。多くの酒屋はそうして売れる銘柄の酒屋に樽ごと売るのが当たり前だった。これを「桶売り」「桶買い」と言う。四季桜は、明治四年（一八七一）の創業だから、関西の老舗のように江戸時代から続く酒屋ではなかったが、三代つづいた地味な地元の酒屋であった。実はその日、高松は初めて四季桜を飲んだのである。高松に言わせれば、宇都宮と言わず、

栃木県、茨城県の酒はうまくなかった。

「栃木、茨城、駄酒の産地」だという。米が悪いのか、あるいは造り方に問題があるのか、それは分からない。

多くの酒屋もそうであるが、宇都宮酒造の酒は、冬、農閑期に越後とか、南部（岩手県）から杜氏（とうじ、とじ）が来て、酒を仕込む。麴づくりから、酒の発酵までを専門に請け負う人々たちである。今はだんだんそういう人たちがいなくなって、自前で酒を仕込む醸造所も多くなっているらしい。

お酒ではなく「四季桜」という桜が本当にあるのを知っているかと、高松は居酒屋の周りの客に聞いた。しかし誰も知らない。知らないのに飲んでいいのかと、高松は思った。「《四季桜》の醸造元、今井源一郎さんなら知っているだろう」と誰かが言った。「いや宇都宮酒造だって知らない」と言う人も。そこで、高松先生は後日、宇都宮酒造に電話を掛ける。自分の名前と身分を名乗り、本当の「四季桜」を知っているか尋ねた。だがやはり知らなかった。宇都宮酒造の社長は今井源一郎。偶

然に、高松と同じ年齢だった。高松は宇都宮高校、今井は作新学院だった。

「私の勤めている宇都宮中央女子高の校庭には四季桜があります。見においでになりませんか」と高松は誘った。

するとすぐに、今井源一郎は、杜氏を連れて見に来た。今井も長年「四季桜」を看板に酒を造っているのに、本物の四季桜はまったく見たことがなかった。代々造ってきたから、そういう名前の酒だとは考えたことはなかったのである。

「四季桜はね、夏を除いて一年中咲く桜なんです。特に秋から冬、そして春も花数が多い。花は中輪の一重で、なかなか清楚な美しさがある。エドヒガンと豆桜の種間交配ということになっている。愛知県豊田市小原には四季桜公園というのがあって秋に行くと紅葉の赤と、桜の白が一度に交じって見え不思議な光景を見られるらしい。四季桜祭りが観光の目玉になっているんです」と高松先生は説明した。

それ以来、宇都宮酒造の今井源一郎社長と高松先生と一緒に酒を飲む仲に

なった。2人は意気投合した。高松は桜だけでなく、酒に関してはかなりの酒豪、全国の酒の味は知っているつもりだった。あるときは、女房同伴のふた家族で、宇都宮酒造に毎年来る越後の杜氏、番場光栄さんの実家に泊まりがけで行った。越後長岡の有名な「長岡花火」を見に行ったのである。杜氏の番場光栄さんは長岡の来迎寺というところにおいて、日ごろは米を作り、農業をしているが、毎年11月ごろ、長岡に雪がちらつくころになると何人かの郷党をつれて宇都宮に来る。そして皆で、蔵に泊まる。蔵人といわれるゆえんである。蔵に寝泊まりしていると、夜中でも、四六時中、酒の醸し具合がチェックできた。途中、正月だけは郷党たちは一度長岡に帰すが、番場だけは残った。そして冬「甑倒し」の終わる二月の末まで、滞在する。それが毎年のしきたりだった。

今井と高松と番場の3人が集まると当然のことながら酒の話になった。

「何とか宇都宮でもうまい酒はできないものか」、3人はいろいろ談義をした後で、まず、酒米から吟味した。

酒米にする米はタンパク質の少ない、脂肪分の少ない方がいい。米粒は大きくて磨いたとき、中の白く濁った心白という部分が大きい方がいい。古来、酒造りに使われていた米は「美山錦」とか「出羽燦々」といろいろあるが、近年、一般的には酒造りに適している米は、岡山県で造られた「雄町」で、それを改良した「山田錦」と「五百万石」という品種がある。「山田錦」は兵庫県を中心にたくさん栽培されている。タンパク質も少なく、雑味が少なく、芳醇な味わいに仕上がるといわれている。一方、新潟県で主に栽培されているのが「五百万石」であった。端麗ですっきりした味わいだといわれている。どちらを使うか。これもまた難しい問題である。

今井は「山田錦」を自分の家で代々持っている一町二反歩の田んぼに植え、それで酒を造ることにした。実った米は千粒で26グラムもあり、これを精米機にかけて削れるだけ削った。

また、酒造りには酒母が大切。蒸した米に麴と酵母を入れ、酒母を造る。

このときの仕込み水を、番場は、わざわざ埼玉県の鴻巣^{こうのす}まで行って運んできた。酵母の種類もまたいろいろたくさんあって、何を使うかも問題であった。

また酒造りのもとの水は、今井家が代々大切にしてきた敷地内にある井戸だ。鬼怒川の伏流水ともいわれている軟水である。今井と番場は考え得る最上の方法で、かつ、さまざまな新しいことにも挑戦した。

そして出来上がった酒に少しだけ、醸造用アルコールを入れる。このままだと口当たりがきついからだ。醸造用アルコールはいろいろあって、水あめのようにドロドロしたものから、あっさりした液体のようなものまで。どれをどのくらい入れるかで、口当たりが随分違う。昔からの日本酒を飲んでいる人には、むしろドロドロした酒を好む人もいるからだ。こうしてできたのが「吟醸貴酒・花しずく」であった。何ともいえない芳香とすっきりとした味も申し分なかった。もちろん命名は高松であった。

この酒をもって今井は全国の清酒の

品評会に出し、並み居る灘や伏見の名酒を抜いてベストテンに入った。まだ吟醸酒というのが一般的でなかったころである。「栃木、茨城、駄酒の産地」という自虐的名言に一矢報いたのである。しかし、この酒はまさに手作りの特上品だから1年にひと樽しか作らない。なかなかぜいたくな限定品だった。

高松はまた吟醸酒「花しずく」のほかに桜シリーズとして、本醸造酒「初桜」、^お澱酒・濁り酒「冬の華」というのも命名した。

さらに「花しずく」の吟醸酒の技術を生かして、新しく作られたのが「四季桜・花宝」である。こちらは純米吟醸酒として最後にアルコールを入れない。

ところが、この「四季桜・花宝」が、若者に人気のグルメ漫画「美味しんぼ」に取り上げられた。『ビッグコミック・スピリッツ』で連載されていたもので、テレビ化され、単行本は1億3500万部も販売されているベストセラーだ。その第4巻と、第56巻で2回も紹介されたのである。2回目は、落ちアユのころに真子や白子でつくる「白ウルカ」と

あわせて「四季桜・花宝」を飲むと最高だと紹介された。

「四季桜・花宝」のラベルはもちろん桜の花で、5枚の花びらが大きく描かれている。このラベルは、地元の版画家、川上澄生の筆致に似せて、高松がデザインし、桜の木で木版を彫った。ラベルの紙はやはり地元¹の烏山和紙を使った。烏山和紙というのは宇都宮の隣り那須烏山の、飛鳥時代から伝わるという和紙で、古来、那須コウゾと那珂川の水でさらした表面のなめらかな、しかし漂白しない薄茶色の素朴な味の和紙。これを手でちぎったように切って使った。最初は蔵人たちも全員で、採色、紙の裏から色を付ける「裏差し」をして、手で一升瓶に一枚ずつ貼った。こちらも年にひと樽の限定品である。

そのうち「花宝」は評判になり、需要が増えて、今ではラベルは印刷し、機械で貼って、四合瓶で売り出している。「桜校長」高松祐一と、醸造元の今井源一郎、それに杜氏の番場光英が作り出した桜の名前の銘酒である。

「マクロン主演！」のウクライナ和平案

——習近平の苦心、その挫折後に見えるもの

田畑光永（会員）

「フランスが危機を政治解決するための具体的な方策を出してくれることを歓迎する。中国はそれを支持したい。そして建設的な役割を果たしたい」（4月7日・新華社広州電）。

これを読んで、私はえっ？ 何かの間違いでは、と読み返したが、間違いではなかった。中国の習近平国家主席（以下敬称略）が中国を公式訪問したフランスのマクロン大統領（以下敬称略）との会談で発した言葉である。

4月初めの5日から7日までの3日間、フランスのマクロンが中国を公式訪問した。エアバスなど仏の大手企業約60社の首脳をともなつてのにぎにぎしい

訪問であった。そして同氏と習近平は少なくとも3回、会談し、また2回、夕食をともにした。最後の7日、マクロンは南の広州を訪れて大学で講演したのだが、習近平はわざわざ北京から広州に出向いて押しかけガイドをつとめ、マクロンを自分の父親とゆかりの名園、「松園」を案内して、長時間「ノーネクタイでの散歩」をともにした。その上、前夜に続いて2度目の夕食を振舞ってさらに会談を続けるという、なんとも密度の濃い首脳外交を展開したのだった。

それはたんに気が合ったからというわけではなかった。習近平にははっきりとした目的があったからである。どう

しても推測を挟んでのことになるが、私なりの筋書きを……。

「それを中国は支持する」

まず、事の経過を整理しておこう。マクロンと時を同じくして欧州委員会のフォンデアライエン委員長も北京を訪れていた。どうしてかち合ったのかは不明だが、その結果、6日には欧州の2人の首脳と習近平はそれぞれ個別に会談したほかに、3人での会談も開かれた。

それらの会談では、ウクライナはもとより台湾問題も話題になり、これについてはフォンデアライエン委員長が個別会

談で、「台湾海峡の安定が何より重要だ。平和と現状維持がわれわれの明確な関心事だ。緊張が生じた場合は対話を通じて解決するべきだ」と、武力行使の可能性を否定しない中国側に釘をさすような発言をしたと報道されている。

これに対して習近平は「一つの中国の原則に言いがかりをつけるなら、中国政府と人民は絶対に許さない。中国が台湾問題で妥協すると期待するのは妄想だ」と反論したという。いずれも公式的な言い分の表明といったところで、顔を見た以上、双方ともこれだけは言っておかねば、というところをぶつけ合った形である。

一方のマクロンが台湾について個別会談、三者会談を通じてどんな発言をしたのかは報道では明らかでない。事後に発表された「共同声明」ではその第6項にさりげなく「フランス側は一つの中国政策を堅持することを重ねて表明した」とある。

さて、問題はウクライナについてのやり取りである。

6日の習・マクロン公式会談での習

発言——「欧州が危機を政治的に解決するために建設的な役割を果たすことを中国は支持する。フランスとともに国際社会が理性と自制を保ち、危機をさらに悪化させたり、さらには制御不能に陥ったりさせないように呼びかけたい」（中国外交部のHP）。

ここで習は「フランスとともに」との言い方をしている点に注意していたきたい。

そして7日。新華社広州4月7日電（記者楊依軍）は「双方は引き続きウクライナ危機など、ともに関心のある問題について、深く意見を交換した」と書く。

習発言——「ウクライナ問題については、中国は決して私利によって問題を処理しようとはせず、終始、公平公正な立場に立つ。関係各国はそれぞれ責任をもって対処し、政治解決の条件をつくりださなければならない。フランスが危機を政治解決するための具体的な方策を出してくれることを歓迎する。中国はそれを支持したい。そして建設的な役割を果たしたい」

マクロンの発言——「フランスも同

じように考える。ウクライナ危機を解決するには各方面が合理的に問題をとらえることが重要だ。フランスは中国の国際的影響力を重く受け止め、中国と密接に協力して、危機の早急な政治的解決のためにともに努力したい」。

楊依軍記者は、ここで「夜色ようやく深まり、習近平とマクロンは別れの言葉をのべた」という1行を挟んで、「習近平はこう指摘した」と続ける——

「この二日間、われわれは北京と広州で深く、質の高い意見交換をして、互いの理解と信頼を深めた。今後の中仏両国の二国間、国際間での協力の方向が明確になった。そして中仏関係、中国と欧州の関係、さらに多くの国際的および地域的問題でも同様の、あるいはよく似た見方をしていくことは大変喜ばしい。これは中仏関係のレベルの高さと戦略性を表している。引き続き貴方とは連絡を密にし、中仏両国の全面的戦略的互恵関係を新しい高みに引き上げたい」。

マクロンの挨拶——「習主席の温かいおもてなしに深く感謝する。二日間

の意見交換で、中国の悠久燦爛たる歴史、文化についての理解、現代中国の政治理念についての理解が深まった。今回の訪問は大きな成功で、豊富な成果を得た。必ずや中仏関係をさらに発展させると思う。習近平主席とは密接に戦略的意思疎通を続け、来年、習近平主席がふたたびフランスに来訪されるよう期待する」。

今回のマクロン訪中のムードを理解していただくために引用が長くなったが、ポイントは6日と7日で習近平のウクライナ問題についての発言が大きく変わっている点である。

6日は「ウクライナ問題の解決に欧州が建設的な役割を果たすことを期待し」、「フランスとともに」の次は「危機をさらに悪化させないよう呼びかけたい」と、まあ平凡な、ありきたりの文言が並んでいる。

ところが7日になると、調子ががらりと変わる。フランスに「和平案を出してくれ、中国が支持するから」と、ウクライナ戦争の解決をめざして国際的な公式、非公式のやり取りの場面を

予想し、そこで両国が主導権を握って事態を動かそうという戦略を持ちかけているのである。

しかも「建設的な役割を果たしたい」と言いつつ、出されるべき提案の内容には一言も触れていない。言うなれば、どんな案でもいいから出してくれ、そして両国主導で事態の解決―停戦を目指し、戦後の主導権を両国で握ろうではないか、という思い切った提案である。

開かれてもいない、もっと言えば、開かれるめども立っていない場面での戦略戦術を、それも小声で持ちかけるならとにかく、天下に向かって大声でやりとりするというのは、およそ常識的でないが、習近平の立場で考えると、ほかに今の手詰まりを乗り切る手段はないのかもしれない。「中＋ロvs米＋西側諸国」という対立の図式に「中＋仏」という一極を加えることで、世界を多極化して、硬直した事態を動かせるのでは、と習は考えたのではないか。これがマクロンに対する異例の厚遇の理由ではないか。

中国がプーチン大統領のウクライナ

侵攻を支持したことは天下周知のことであり、開戦1年後の今年2月24日に出した「ウクライナ危機の政治解決に関する中国の立場」という文書でも、「戦争に勝利者はいない」と恰好をつけて、「停戦と交渉開始を主張」しているが（第3項、4項）、肝心の「最初に銃口を開いたのはどちらか」、「どこの軍隊がこの領土にいるのか」という事態の根幹には一貫して口を閉ざしている。だから、言うことにまったく説得力がない。開戦当初、中国はよく「是非曲直」を明らかにすると言っていたが、最近はこの言葉さえ口になくなった。

一方、負けるわけにはいかないプーチンからはおそらく西側のウクライナへの武器援助に対抗する援助を求められているであろう。しかし、中国としてはここで公にプーチンを助ける行動に出ることはなんとしても避けたい。ロシアに武器を送ったりすれば、中国はロシアと一蓮托生、世界の悪役となり、そればかりでなく世界を戦争の淵に立たせた張本人となってしまう。さすがにそれはためらわれるというわけ

で、習近平としては身動きができない状況に立ちすくんでいるはずなのだ。

したがって、ここで新しい顔の仏を仲介役として登場させ、中国がその支持者として片棒を担ぐ形になれば、何とか自分のメンツも立つというのが、7日の非公式会談でマクロンに持ちかけた「仏が提案、中国が支持」（提案の内容は不問）という苦肉の策だったのだ。

おそらくマクロンは不意打ちを食らって驚いたはずだ。しかし、誰がやろうと妙案がないのは同じだとすれば、ここは「中仏連携」という目新しさにかけてみる気になったのではなかったか。

予想外？ 大きな反発

しかし、このマクロンの判断は少なくとも西側メディアの世界では批判の嵐を巻き起こすことになった。

マクロンにすれば、中国といえば、台湾に対して「武力行使をしないとは絶対約束しない国」というレッテルを貼って、ロシアの味方と決めつけるだけでは何も生まれない。米には米の立ち位置があるだろうが、遠いヨーロッパ

パまでが米と同じポジションに立っているのは身動きがとれない、といった思いがあっても不思議ではない。

そこでマクロンは中国から帰って、いろいろな場面でこういう言い方をした。

「欧州が直面している最大のリスクは、自分たちのものではないリスクに巻き込まれて、戦略的自律性を発揮できなくなってしまふ事態だ。パニックに陥って、欧州自身が『われわれはたんなる米国の追従者』と信じてしまっている。台湾危機の加速はわれわれの利益になるのか。答えはノーだ。最悪なのは、台湾問題で米国のペースや中国の過剰反応に合わせて、欧州もそれに追従しなければならない、と考えてしまふことだ」。

あるいは「同盟国は属国ではない、自分で考える権利がわれわれにないということではない」と言い、また同時に「われわれは一つの中国政策を支持し、事態を平和的に解決する方策を探している」とも言う。

しかし、こうしたマクロンの発言はたちまち批判のつぶてにさらされた。その内容は、たとえば「フランスが独自路線

を歩むことで、国際社会での地位を確保しようとするドゴール主義の名残りであり、その意味は西側諸国に身を置きながら、米と共同歩調をとらない、という立場にすぎない」というものや、「もし欧州が台湾をめぐる米中間で米の味方をしないのなら、ウクライナについて米は欧州の味方をするべきでない」など。要は欧州も台湾を守る立場から離れるべきでない、という声である。

米トランプ前大統領にいたっては「私の友人であるマクロン氏は中国の尻にキスしている。フランスは今や中国につこうとしている」となじったと伝えられ、これに対してマクロンは「彼の発言については何も言うべきことはない。対中関係を悪化させたのは彼なのだから」と答えたという。

要するに欧州全体の雰囲気としても、中国はロシアとならぶ悪役であって、そこを手を組むことは、裏切りに他ならないということのようである。

そうした賛否のやりとりのさなかの4月16日、日本の軽井沢でG7外相会議が開かれた。ここにもマクロン発言

が影を落とし、「法の支配に基づく国際秩序を守るための協議」に力が入ることになったのは皮肉であった。

会議では、「中国による力を背景とした一方的な現状変更の試みに反対する」ことで参加国が一致し、共同声明には次のような一文が書き込まれた。

「中国に率直に関与し、われわれの懸念を中国に直接表明することの重要性を認識する。国際社会の責任ある一員として行動するように求める。……

東・南シナ海における状況を真剣に懸念する。力や威圧によるいかなる現状変更の試みにも強く反対する。台湾海峡の平和と安定の重要性を再確認し、兩岸問題の平和解決を促す」。

マクロンに対する習提案は双方が同意したとしても、それを実行に移す舞台さえまだ存在しない。その段階で仏を含めて欧州の4か国の外相たちが出席した場で、こんなふうに中国をたしなめる文章を発表されては、せっかくの習提案もここではや命運は尽きたと見るべきだろう。中国としては、イランとサウジの間を取り持って仲直りを実現させて気を

良くした勢いで、ウクライナでもと勢い込んだのであろうが、「国家主席と大統領」と、登場人物に不足はなかったのに、「中仏枢軸」結成という構想はあえなく挫折した。

ここで付け加えておきたいのは、この話とロシアのプーチン大統領（以下敬称略）との関係である。プーチンと習近平は3月21日にモスクワで会談している。この会談の外見的仕掛けは大層なものであった。クレムリンの一边数十メートルはあろうかという広大なホールの両端の入り口を直線でつなぐ長い絨毯の通路を両端から2人が同時に中央に向かって歩き始め、中央部の人の背丈の数倍はあろうかという巨大な両国旗が組み合わされている地点で握手、そこで会談という、あたかも昔の皇帝どうしの会見のような芝居があったものであった。

報道ではこの会談ではウクライナ危機の対話による解決、資源協力の強化などを話し合ったとされている。実際に何が話題になったかはもとより不明である。興味深いのは4月17日、中国の李尚福国防相がロシアに赴いてプーチンと会談

したことである。表向きは3月の全人代で国防相に新任されたことの挨拶とされているが、マクロン帰国後10日という日取りは、挨拶にことよせてマクロンと習の話の報告では、と推測させる。

というのは、プーチンが外国の客人と会う際には人によって座る位置が異なるので、李国防相がどこに座らせられるかが注目された。テレビで見るとプーチンの応接室には細長い楕円形のテーブルがあり、重要な、あるいは親しい客人とは幅2メートル弱ほどの中央部に間にして会話するのに対して、それほどでもない、あるいはどうでもいい、さらには気に入らない、といった客人とは、6、7メートルはあろうかという長方形の両端に分かれて座るのが慣例だからである。私の記憶では確かマクロンも端に座らせられたのではなかったか。

李国防相の場合、気に入る、入らない以前に格が違うので、両端型が自然なのだが、テレビで見た限り、シヨイグ国防相とならんで中央部でプーチンと対面していた。ということはプーチンが聞きたいことを伝えるべく李はモ

スクワに派遣されたとも考えられる。

その場合、3月のプーチン・習会談ですでに「中仏新軸」の話が出ていたとすれば、その結果を李国防相が就任挨拶を兼ねて報告に赴いたということとも考えられる。座る場所からここまで話をつなげるのは下司の勤ぐりか。

プーチンとは 習近平とは

ところで、仏と組んで和平提案を、という習近平のアイディアがたちまち西側諸国の反対論に押しつぶされたのは、私にとっていささか意外な結末であった。今、プーチンは西側から見れば侵略者そのものであるから、逆にプーチンの方も西側の言い分に耳を傾けないということとはありうる。そうなるのと何とか停戦を実現しようにも、よほど一方的な結末が迫って来なければ、無理であろう。その点、中国がとにかく調停者の立場に立てば、ロシアも無下に無視することはできないはずであるから、事態を収束に向かわせることができるのでは、との見方もありうると思った。しかし、欧州での受け取り方はまっ

たくそうではなかった。中国が台湾海峡での武力不行使を約束しないことの意味は、むしろ欧州における受け取り方のほうがアジアよりきびしいようである。確かに昨年8月、米のペロシ下院議長（当時）が台湾を訪問したときの中国の怒りようは常軌を逸していた。場所を予告したとはいえ、平時にあれだけのミサイルを公海に撃ち続けるといふのは異常としか言いようがない。また今年3月には台湾の蔡英文總統が米カリフォルニアで、ペロシ氏の後任のマッカーシー氏に会った時も中国は空母まで動員して台湾を威嚇した。

人を脅すという行為は個人なら犯罪である。中国もまさか他国に向かってああいふ行動はしないだろう。台湾は自国の一部だから何をしても国際問題とはならない、だからいいのだという発想が垣間見える。

そういえば、ロシアのウクライナ侵攻でも、同様の発想がプーチンを動かしているようである。しかし、その目的は一体何なのだ。昔の戦争なら便利な言葉として「国益」のためと言えた。

昔の日本も「満蒙は日本の生命線」といって侵略を拡大した。

しかし、今、ロシアと中国がしていることは、通常の意味の国益のためではない。そう言える実体がない。国益にとってはむしろ大きなマイナスだ。それなら何のためか。プーチンは「ウクライナで、今、戦場となっている地方のロシア系住民がネオナチ勢力の迫害を受けている」などと言っていたが、真に受ける人はいなかったし、かりにそう言えるようなことがあったにしても、それが大規模な地上戦をしかけることを正当化できるほどの材料とは思えない。

中国にとっての台湾もそうだ。昔の内戦で共産党軍が勝ちきれなかったから、台湾には国民党政権が残った。そのまま70年余の歳月が過ぎた。それを「こちらの支配下に入れと言っているのに拒んでいるのはけしからん」と怒っているわけだが、勝った方にも、負け方にも、当時の人間はもはや誰もいない。いるのは2代目、3代目だ。それなのに上から目線で「けしからん」といっても、はじまらないではないか。

時効切れとなった請求書を振り回しているようなものだ。

中国の場合、台湾ではすでに住民が投票で政権を選ぶ体制になじんでいる。一方、大陸の方はなぜかいまだに一党独裁の専制政治だ。一緒になろうというほうが無理だ。一緒になりたいなら、大陸も民主化すれば、台湾住民だって拒否する理由はなくなる。

今では経済的には双方の間で自由に投資も取引も行われていて、別に「国益」が損なわれることはないのだから、双方から期せずして統一しようという機運が盛り上がるまで現状を続ければいいではないか。

それなのに「緊張」が起こるのは、大陸側の支配者、つまり習近平が台湾を屈服させて、「どうだ、オレは凄いぞ！ 偉いだろ！」と自慢して、自分がいつまでも君臨していたいからなのだ。プーチンも同じだ。彼は来年の大統領選挙までですでに20年、大統領の椅子にある。1期4年時代に2期、その後、1期だけメドベージェフにやらせて、自分は首相にまわり、次にまた立

候補して当選し、今は6年任期の2期目である。ロシアの憲法では大統領は4年任期で連続2期以上の多選はできなかったために、最初の8年でいったんやめ、1期休んでまた出馬したのである。その2回目も来年で2期目が終わるところに来ている。

その間、2020年7月の憲法改正で「大統領は2期連続で務めたら、それ以上は立候補できない」となったのだが、翌21年4月、前年の改正の2期以上の多選禁止は、「改正以前の大統領職在任期間は規定の対象外とする」という、対象者はプーチン1人だけというびっくりするような新改正がつけ加わり、プーチンは来年の大統領選挙には「新人」として立候補できるようになった。それにしても、次また2期12年、プーチンが大統領を務めると、じつに32年間、大統領職に在職となる。ほとんど終身である。人間の欲にはきりががないものだと思心するしかない。しかし、それには国民がびっくりするような実績がほしい、ということ、ソ連邦解体の際に正式に独立国となったウクラ

イナの首に鎖をつけて、もう一度ロシアの内部に取りこみたいのだ。「どうだ、ロシア帝国の復活だ！」と。おそらく9年前、クリミアをウクライナから取り上げた時の国民の喜びようが忘れられないのであろう。

＊＊新しい戦争＊＊

これは考えれば新しい戦争である。もし、習近平が台湾を武力で統一しようとするれば、それもまた同様に新しい戦争である。いや、大昔の戦争の復活と言わべきか。

近代以降の資源や市場を奪い合う戦争、あるいは宗教戦争とも違う。さらには社会体制の優劣を競う資本主義対社会主義という戦争とも違う。プーチンと習近平（もし始めれば）の戦争の共通点はまず国のためでもなければ、誰かのためでもなくて、プーチン、習近平個人のための戦争という点だ。

2人の戦争は同種の戦争だ。建前として私的資本の活動を禁止するか、制限していた社会主義を看板とする国で、その制度がうまくいかず、生産活動を

思うように発展させることができなかったために、一党独裁体制、あるいは個人独裁体制の政治制度はそのままにして、外資を導入し、かつ私的資本の活動を認め、それが拡大した国家で権力者が起こした、あるいは起こそうとしている戦争、である。

近代以来、私的資本が徐々に成長して資本主義生産体制が生まれ、普遍化した国々には、さまざまな問題が発生したために社会主義思想がうまれたわけだが、現在では多数の国がそれぞれ困難を抱えながらもそれなりにおさまって、市場経済国家として世界の大勢を形作っている。

一方、社会主義革命によって共産党独裁体制を実現し、それが行き詰まって、前世紀の後半から終盤にかけて外資を入れるようになった国の場合は、独裁政権で権力を分け合っていた階層が今度は手段を選ばずに外資を奪い合っていて、新しい富裕層が生まれた。同時に一方では富の争奪戦に負けた層、さらにその争いに加われないまま、従来からの貧困を引きずったままの大衆と、

さまざまな階層に社会は分断された。

そして権力を利用してのし上がった者どうしの階層内部での権力争い（腐敗、汚職の氾濫）がまだくすぶっているというのが現状であろう。混乱、奪い合いの間に積み重なった憎悪、怨念もろもろが、まだ渦巻いている。のし上がった階層は幸運を喜ぶと同時に、悲運に落ちた、あるいは落とされた人間たちの憎悪、怨念から身の安全を守らなければならない。そこに独裁者が生まれる。

かつては社会主義イデオロギーの正統性を争って銃火まで交えたロシアと中国は、一方は社会主義の祖国を標榜した挙句にそれを弊履のごとく捨て、一方は社会主義の旗を押し立てながら実態は似ても似つかない金権と汚職がはびこる社会をつくり上げた。

こう見てくると、前世紀末、ソビエト連邦の解体で、小さくなったロシアでのし上がったプーチンと、幸か不幸か台湾との統一が実現しないうちにトップに上り詰めた習近平が、国内の格差や不満を超越して民心をまとめあげ、つかの間の優越感を与えられる切り札

として、いずれも盛時の版図の回復を是が非でも自らの手で実現したい、そして叶うならかつての皇帝の如き座に上り、生涯それを手放さずにいたいと考えてるのは必然の成り行きかもしれない。

現代において、およそ時代離れた彼らの野心の本質を隠すのが「内政に干渉するな」という国際関係の原則である。人間を殺傷するのはやめろ、というのは、相手が外国人の場合の理屈であって、自国民、あるいは自分が「自国民あるいはそれに準ずると考える人間」はそれこそ「煮て食おうと焼いて食おうと」余計な口出しをするな、ということになる。

こんな理不尽な理屈はないのだが、政権に反対する声を徹底的に弾圧し続ければ、いつの間にか「不正義」も「正義」に化ける。多くの独裁者の歴史がそれを教えている。とすれば、声を奪われている独裁国家の国民にその事実の重大さを思い起こしてもらいうに、周りから声をかけ続けなければならぬ。道はそこにあるだけだ。

陶々俳壇

陶陶句会
結果
2022年11月

兼題 「口切」「泡」

馬場由紀子

蹲の筧あらため口を切る

橋本紅杓

◎正堂

蹲にわたす管をしつかりあらため水を入れる様の景がよくわかる。

生垣の光輝き秋高し

〃

◎由紀子

秋の清々しい日差しとどこまでも青い空の美しさを感じます。

秋高し視線を梢に向けばなほ

〃

◎二三四

泡立ちし口切の茶は香りたり

瀬崎明良

◎紅杓

茶道で、晩春のころ採取した新茶を陶器の壺のなかに詰めて口を封じておいたのを、初冬のころ、茶会の席上で封切りする。口切したばかりの茶の香が漂ってくる。レモンの香が、酸味の感じ方を強めるように、香は味覚を強めるといふ。新茶の味を十分に堪能できたことでした。

◎善一

新茶を茶壺から出し茶碗のなかで茶を立てると、良い香りが茶室全体に広がってきて、とても良い気分となり、美味しく茶をいただいた。

◎正堂

口切は母の残せし茶碗愛で

〃

◎善一

口切とは新茶を入れた壺の封を切り茶を取り出すことをいう。亡き母が生前愛用していた茶碗を出して茶を立てて母を偲ぶのであった。

ハバネロの秋思断ち切る赤さやか 日野正子

◎二三四

◎由紀子

ハバネロの辛さで秋思を断ち切るといふ作

者の情念の強さにグケツと惹かれ、心を掴まれてしまいました。

◎紅杓

朝寒や白粥ふつと泡立ちぬ

〃

◎明良

秋の深まる朝に粥の泡立つのを見て今日明日のことを思うのでしょつか。

◎二三四

◎善一

晩秋になると朝は著しく気温が下がっており手足の冷たさが身に沁みる。その寒さを吹き飛ばすように白粥が鍋の中でふつとつと良い香に満ち、泡が立ってきて美味しく出来る上がる。

◎由紀子

口切や早咲き椿の一二輪

〃

◎二三四

◎正堂

椿も今日の日を持ち望んでいたのでしょうか。

◎由紀子

卒寿得し吾を囲みておでん酒

大内善一

◎紅杓

豊饒として生きていられる姿は素晴らしいものです。おめでたい感じがします。

◎正堂

口切や招かざる客到来し

〃

◎明良

招かざる客なのか意味深い言葉です。

伊藤正堂

◎正子

大夕焼極楽浄土母の棲む 圧倒的大画面ですが、「棲む」は動物について使つのではないのでしょうか？

◎二三四

蹲の一滴冬を広げる

〃

◎善一

蹲踞にそそぐ青竹の穂から落ちる水の最初の一滴が、その中で広がっていく。冬の天を広げるよた。

◎由紀子

鍬の土削り落として畑仕舞

〃

◎正子

霜が降りる時期になり野良仕事も終わりになりましたか。

口切や亭主茶筌の軽やかさ

松島二三四

◎正子

茶の宗家を継いだ友人の計報に驚きました。が、茶さじを貰ったのを思い出しました。

◎明良

極めた人の動きは無駄がなく美しい。

◎正堂

霜月へぼとり発泡入浴剤

〃

◎由紀子

ああく、気持ち良い。

◎由紀子

坂道の移動スーパ―秋うらら山間へ食糧や日用品を届けるトラックでしょつか。そこに集うお客のためにも秋はつうらかであってほしいものです。

口切や露地に清しき風の径

馬場由紀子

◎正子

清々しい風情をこのように表現できるのかと感心いたしました。

◎二三四

◎明良

暑い日が終わって涼しい風が吹き抜けて秋が始まったようです、コロナが終われば旅行の時期でしょうか。

◎正堂

大根煮るやさしく掬ふ灰汁の泡

〃

◎正子

◎二三四

◎紅杓

子どもの頃かぼちゃ、サツマイモ、大根と嫌になるほど食べました。最近は大根の味が分かって始めて大好きになりました。

◎善一

「大根煮る」を十二月九・十日京都鳴滝の了徳寺である行事ではないかと推察した。親鸞聖人が建長四年（一二五二）十月、八十歳の時にこの地に足を止めて法を説いたところ、土地の人たちから大根を振るまわれ、それを喜んだ親鸞聖人は名号を残したといわれる。この故事を記念するため、二日間大根を炊き振る舞つた。

◎正堂

中国

ウエッチング

編・訳 上松玲子

空き目立つ立体駐車場

土地の利用効率の高さを理由に立体駐車場が次々と建てられた。だが、最近は多くの駐車場に空きが見られる。

李さんのテスラのモデルYは、病院の駐車場入り口で管理員に制止された。駐車場に貼られた細かい規定を見ると、李さんの車は重量オーバーとのこと。事故があっても駐車場は責任を持たないとも。

重量だけでなく、車のサイズにも制限がある。北京大学第三病院の立体駐車場は幅1・

85、車高1・5メートル以下と決められており、わずかのオーバーでも入庫できない。立体駐車場の停車スペースは狭すぎて、車両破損事故もよくあると言っている趙さん。2段式の駐車場では上段に車があることは稀で、設備を取り払って平面駐車場にした方がいいのではとも言っている。

自動車保有台数の増加に伴い多くの居住区で機械式の立体駐車場が作られたが、利用料の高さもあり人気がない。

従来の立体駐車場はガソリン燃料の普通乗用車を基に設計されたもので、SUVや新燃料車がこれほど普及するといふ前提に立っていなかったのだと、業界関係者は指摘する。

〔北京晩報〕2023年2月8日

13歳まで図書館に入れない

図書館の開架コーナーの利用と貸し出しは13歳以上に限るといふのは、2013年より実施されている政策だ。

中学入学後もしくは若しくは、学校指定図書が運よく児童図書館で見つからない限り、保護者が代わりに図書館へ探しに行かなければならない。

一方、多くの書店やブックカフェは年齢の制限がなく誰でも入れ、人気を博している。公共の開架式図書館もサービスの質を上げるべきだろう。

報道によれば児童図書館を敬遠する児童たちもいるという。児童図書館は年少の子どもが多いため騒がしく、幼稚な本や絵本ばかりで、書店にあるような『容疑者Xの献身』や『白夜行』はないからだとか。また、映画『流転の地球2』を見て原作に興味をもったが、児童図書館には絵本しかなかったそうだ。13歳の壁撤廃を望む声は多い。

公共施設の開架は管理に負荷がかかるが、人員を増やして秩序を守ることはできる。また、児童図書館の基礎のも

と、青少年図書館を増設すれば、青少年も満足できる図書館にできる。年代別の開架コーナー設置もできるはずだ。

〔新京報〕2023年2月22日

デリバリーによる食品ロス

オフィスビルのごみ箱には食べ残しのご飯、野菜炒めがどのごみ箱にも必ず入っている。その様子を実際に見て、想像以上の食品が無駄にされていることに気がついた。

あるオフィスビルで付近を検索すると実に多くのデリバリー可能な飲食店が見つかる。そしてどの店も段階的に一定の注文金額を超えると値引きするサービスをしている。そのため10元ほど余計に注文すると、10元以上の値引きが受けられるということが起きる。7元のキャンペーン品を併せて買えば、8元の割引があるという場合もある。

また、どの店もメニューにサ

イドメニューやトッピングを目立たせて、少しでも客単価を上げようという工夫もみられる。

「北京市反食品ロス規定」では、「飲食店はネット注文のページに食品の規格、量の目安、味、何人前相当かなどの情報を表示しなければならない」と規定している。しかし、多くの店では量についての記載がない。例えばチャーハンの表示も店によって「1人前」だったり「1パック」だったりでグラム数表記はない。ダブルハンバーガーも写真ではわからないが実物は大きさが店によってかなり違う。分量が明記してある店でも、500gの大皿はあっても小皿はない店、小皿はあっても大皿がない店という問題がある。調査のために様々なフードデリバリーを試した。どの業者も配達完了メッセージ後に顧客に評価を求めるが、項目には食器も受け取ったか、味はどうか、包装は万全だった

かという内容ばかりで、量が適当だったかという評価項目はなかった。

『北京日報』2023年2月22日

親に強制された結婚

3月1日、最高人民法院が社会主義の核心的価値観を発揚する十大民事案件の1つとして発表した事件がある。ある女性が親に強要された婚姻の取消しを求めた裁判だ。

母親が望んだ縁談の相手は経済的に恵まれた親戚筋であった。女性は拒否したが母親は女性を実家に呼び戻し、承諾しなければ死ぬと騒いだ。家族の崩壊と母親が早まるのを案じた女性は仕方なく婚礼を挙げたが、1年経っても愛情は芽生えず、夫婦生活もなかった。それでも母親は離婚を許さず、母娘の諍いは暴力沙汰にまでなった。そしてついに女性は婚姻関係の取消しを求めて訴えを起こしたのだ。

民法には「脅迫強制された結婚は強制された側から取消しを訴えることができる」とある。女性の母親は著しく女性の婚姻の自由を侵害しており、さらにその行為は脅迫にあたる

として、裁判所は婚姻を無効とした。さらに裁判官は世の親たちのそうした行動を論じた。

『人民ネット』2023年3月2日

個性失う古い町

「古鎮」、古い町並みを留める観光地といえば、必ずシルク、キーホルダー、ハンドメイドアクセサリーなどが売られて

いる。ご当地フードまでもがどこも同じ臭豆腐やソーセージ、ナツメ餅ばかり。いつの頃からか古鎮はどれもそっくりになった。報道では古鎮の類似度は99%ということだ。中国古城および文化研究院の林鵬院長は、以前こう指摘していた。中国には開発中も含め2千8百もの古城があり、

数は世界一だが、真に人々の記憶に残るものはいくつあるかと。古城観光も買い物、喫茶、食事、ショー見物と同じようなものだ。

よく言えば、業者は各地の古鎮で何が売れているのか研究熱心で行動的だということだ。だが、同質化によって古鎮がもつべき独特の文化は薄められ、訪れる人に残る印象はどこも街全体が同じような雑貨店だというものになり、集客力が弱まる。

商業的利益の追求は理解できる。しかし同質化は手っ取り早い投資の回収は望めても、長期的な発展は望めないであろう。まず開発業者や管理者の考えを改めることが大切だ。そのためには行政も古鎮認定や観光地認定において独自性を重視する姿勢を示すことが必要だ。民意に耳を傾けることも大切だ。

『北京青年報』2023年3月27日



◆令和5年度第1回理事会の議題（4月20日開催）

今月の理事会は5月に開催される社員総会の議題などを審議した。

【確認事項】

3月16日に開催された第12回理事会の議事録（案）が確認された。

【決議事項】

以下の決議をした。

1. 「令和4年度事業報告（案）」を「第1号議案」とする。
2. 「令和4年度決算（案）」を「第2号議案」とする。
3. 「将来検討委員会からの提言」を「報告事項」に加える。
4. 理事選任の件
5. 監事選任の件
6. 顧問・諮問会委員改選の件
7. 講演会講師謝金増額の件

【報告事項】

- ① 資金繰りについて（定例報告）

② 委員会報告（定例報告）

（事務局長 竹前栄男）

会員だより

◎ 訃報

市岡敏夫氏（94歳）

令和5年3月17日逝去

市川英雄氏（100歳）

令和5年3月30日逝去

謹んで哀悼の意を表します

▼ 寄付

市川英雄様より金一万円也

同好会だより

＜一石会（囲碁）＞

会員が少ないため、ただいま休会中です。新しい会員を募集中です。

＜俳句会＞

対面とズームによるオンライン併用での俳句会を開催しています。

＜謡曲会＞

松木千俊先生のお稽古は一人ずつの個人指導です。ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

みんなの写真館

浜離宮恩賜庭園（表紙）

浜離宮恩賜庭園は、東京都内最大の都立庭園です。元々は1654年に徳川綱重が江戸湾の一部を埋め立てて屋敷を建てたのがはじまりです。11代將軍徳川家斉の時代にはほぼ現在の姿の庭園ができていました。都内にある江戸の庭園では唯一現存する海水の池、「潮入の池」があり、水上に浮かぶように建つ御茶屋など、見所が多数あり、高層ビル群とのコントラストも壮観です。善隣協会に近い利点があり、数年前に環境委員会は、庭園で花見をしながらその中の「中島の御茶屋」で抹茶を楽しむんだことがあります。日本庭園は私にとって、心が落ち着く場所であり、時々訪れています。

（姜晋如）

天津日用化工品製造設備技術展覧会（表4上）

ハルビン機械工業展（表4下）

中国に日本製品を紹介する総合商品展・専業技術展は、日本の民間団体である「日本国際貿易促進協会」が主催し、友好商社が全面協力し中国の主要都市で開催された。国交のない時期、1960年代から国交正常化後の1990年まで、ほぼ毎年開催されていた。

「以民促官」（民間の交流を盛んにして政府を動かす）で、貿易のルートと展示会の両面から、友好の促進と取引の発展に寄与したと思う。当初、日本政府は、米軍の占領政策や朝鮮戦争で、誕生間もない中国を、「チンコム」「ココム」という経済制裁で孤立させようとした。しかし両国の民間団体や経済界の強い牽引により、紆余曲折があったが、中国側の好意で展示品の全品買い上げが実現した。

（新宅久夫）

2023年6月の行事予定

- 13日（火） 14：00 謡曲会（松木先生お稽古）
- 14日（水） 13：00 俳句会（対面とZoomのハイブリッド方式で実施）
兼題「犬」及び当季雑詠から5句を投句（5月末までに）
- 15日（木） 14：00 公開 第6回対面&オンライン講演会（対面とZoomのハイブリッド方式で実施）
『転生一満州国皇帝・愛新覚羅家と天皇家の昭和』から近代日本と満州について」（仮題）
牧久氏（元日本経済新聞代表取締役副社長、テレビ大阪会長、ノンフィクション作家）
- 22日（木） 16：00 公開 第7回対面&オンライン講演会（対面とZoomのハイブリッド方式で実施）
「沖縄基地問題の新局面—米軍基地の過重負担からアジアの外交・安全保障へ」
目黒博氏（ジャーナリスト）
- 29日（木） 14：00 公開 第8回対面&オンライン講演会（対面とZoomのハイブリッド方式で実施）
「岩倉使節団の米欧訪問と第三の開国を迎える日本」（仮題）
泉三郎氏（NPO法人米欧亜回覧の会理事長、岩倉使節団研究家、ノンフィクション作家）
- 30日（金） 14：00 公開 【善隣中国塾】（対面とZoomのハイブリッド方式で実施）
「ショルツ首相の北京訪問を契機にした新たな対中国、対ロシアとの経済関係をさぐる」
塾長：矢吹晋氏（横浜市立大学名誉教授、当会学術顧問）

6月の会議予定

6日（火） 13：00 国際交流委員会	<u>19日（月） 14：30</u> 講演委員会（Zoom）
<u>8日（木） 13：00</u> 理事会（第4回）	23日（金） 13：00 諮問会（第2回）
<u>8日（木） 15：30</u> 広報委員会	28日（水） 13：00 東北委員会
13日（火） 13：00 環境委員会	

※下線は通常日程に変更あり。

哈爾濱機械工業展の兵庫県貿易ブースにて



みんなの 写真館

1985-9-4 天津市にて

